

誰がフュージョンをつくったのか？

——『ADLIB』から「New Sounds」の実相を明らかにする——

岸本寿怜（大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程）

本発表の目的は、1970年代に隆盛した音楽スタイル「フュージョン」を対象に、それがどのように形成・受容されたのかを同時代の一次資料分析に基づき実証的に明らかにすることである。

日本の戦後大衆音楽史において、モダンジャズの受容に関する学術的蓄積は進んでいるが、フュージョンに関する体系的な受容史研究は未だ十分とは言えない。現在のフュージョンの歴史的評価は、モダンジャズを「純粋なジャズ」とみなす旧来の価値観に基づき、「本物のジャズではない」といった、（主に音楽批評を背景とした）通説的理解が支配的である。しかし本発表は、モダンジャズの側から一方的に客体化されるこの通説の妥当性を、むしろフュージョンの受容層の側から再検討する。

この問題意識を実証的に検証するため、本研究は、当時フュージョンを専門的かつ肯定的に取り上げた音楽雑誌『ADLIB』（スイングジャーナル社、1973年創刊）を分析対象とする。同誌は、グラビア特集、奏法解説、そして充実した読者投稿欄などを特徴とする。

発表者は、『ADLIB』1973年秋号（創刊号）から1982年1月号までを対象に、「目次」、「読者の広場」（読者投稿欄）、「編集後記」の三点について、文字情報のデジタル化を行い、言説分析のためのデータベース（DB）を作成した。

DBの分析から、『ADLIB』が創刊当初から一貫して、従来のモダンジャズの枠組みに囚われない姿勢を持っていたことが確認できる。象徴的なのは創刊第2号の「New Sounds 特集」であり、ここではジャズ、ロック、ソウルが融合し衝突したものが「New Sounds」と定義される。これ以降、同誌の紙面上では、編集部と読者の応答関係を通じて「New Sounds」という価値観に対するさまざまな解釈が展開されていた。つまり『ADLIB』は、脱ジャンルの「New Sounds」という独自のカテゴリーによって、同時代の音楽を積極的に評価するオルタナティブな言説空間を形成していたのである。この態度は、のちのクロスオーバー、そしてフュージョンという概念の形成・受容基盤を形成したと言える。

本発表は、日本の音楽史記述において等閑視されてきたフュージョンを、同誌の分析に基づき再評価するものである。分析の結果、フュージョンはモダンジャズ中心史観とは異なる「New Sounds」という価値基準に支えられ、読者の能動的実践を巻き込む形で独自の文化圏を形成していたことが明らかとなった。さらに重要であるのは、『ADLIB』の言説空間は「New Sounds」を単なるジャズの延長線上に捉えていたわけではなく、同時代の拡散する脱ジャンルの流行音楽を認識するための枠組みとして扱っていたことである。これは、ジャズの真正性をめぐって展開された従来の通説的なフュージョン批判が、

【 JASPM37 セッション A-2 】

「New Sounds」を標榜した人々の論理においては、そもそも批判としての有効性を持たなかったことを意味している。